

靴の歴史散歩 ⑨6

皮革産業資料館 副館長 稲川 實

靴業の祖、西村勝三に対し、靴小売商の祖といえ、日本橋に本店があった『鞆絵屋』(後にトモエヤ)の相場真吉(1850～1900)が挙げられる。

この鞆絵屋については「靴の歴史散歩」でもNo⑮から⑲まで、5回に亘って取り上げているが、今回は、まったくユニークな内容のPR誌『レザア レコヲダア』(明治37年10月発行 第一巻第一号 64頁)なるものが発見されたので、これをご報告しておきたい。(写真参照)

発行年から、二代目の相場達之助が社運を賭けて発売した、マッケー式機械製「マッキンレー靴」の販促用刊行物であったことは間違いない。100年前の靴情報誌とあれば興味津々である。

巻頭の〈発行の理由〉に「本誌を名付けてレザア・レコヲダア(皮革記録)という。けだしこの名称のもとに生まれたる本誌の目的は、レザアすなわち皮革を材料とする製品、たとえば靴鞆などのインテレストを進むるにあればなり。晩近社会文物発達の著しき影響を受けし結果、革皮の応用方法すこぶる多岐にわたり、したがって人類の間接生存上、銅鉄ゴム織物と等しく、重大視さるゝに至れり。以下略」とあって、文言に新事業への昂りのようなものを感じる。

本文の〈靴のつとめ〉で、顧客に対し大胆な提言をしているので以下に写す。

「いかに堅牢無比の靴なりとて、もとよりこれ一つの革製品たるに過ぎず。絶えず攻め抜かば、日ならずして命数の尽きるものなり。中流以上の外国人は、通例各種の靴六足以上を、代わるがわる使用するが如し。かくすれば一個の履物も、所要の休養をとって、互にその齢を長く保ち、主人公

へ無二の奉公を尽すに至る。近来洋装の便利を認めるわが同胞中、まったく外国人と差異なき程度において、靴を日常用に供するもの多し。こゝにおいて我らは、洋靴専用者に対し、少なくとも一ヶ年間、以下の数種を併用せんことを勧告するものなり。

黒塗エナメル又はパテント革 編上1足
黒ボックスカーフ 編上1足
茶革ボックス又はウイロカーフ編上2足
黒又は茶革 半靴1足
夏期晴天靴白ズック編上 又は半靴1足
メて六足、他に雨天用としてゴム上包靴(オーバーシューズ)1足備え置くは望ましきことなり。」と結んでいる。

当時の月給が、一ヶ月12、3円の時代である。1足5円から10円はする靴を、六足持てとは、何んとも凄い提言である。はたして説得力があったのであろうか。



タテ22.5cm×ヨコ15.5cm